

核の脅威のない世界のための市民団体

(公益登録協会 ドイツ・ロットヴァイル)

(2006年現在)

◆チェルノブイリ原発事故

ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所では、1986年4月26日、核反応をとめた状態の残熱でタービンが動く時間を測定する実験がおこなわれた。実験を中断させないために安全システムは解除してあった。

そして専門家が不可能だと考えていたことが起こる。原子炉が制御不能になり、放射性物質を含んだ雲が世界を覆った。世界中いたるところで痛々しい傷跡を残した。

ベラルーシはもっとも深刻な被害を受けた。放射性物質を含む雨の70%はこの国に降り、国土の3分の1に及ぶ。11万人が避難を余儀なくされ、多くの村は徹底的に破壊された。

核の雲はロシア国境を越え中欧に、そして北半球に達した。

1986年4月26日以後、チェルノブイリはいたるところに存在している、われわれのところにもだ。

◆私たちの団体について

チェルノブイリでの原発事故にショックを受け、1986年、ロットヴァイルに「核の脅威のない世界のための市民団体」が設立された。

われわれは、原子力の利用は軍事目的か非軍事目的かを問わず生命の脅威であると考えます。

チェルノブイリはわれわれに次の課題を突きつけた：

☆原子力の廃止とエネルギー転換に向けてより集中的に取り組むこと

☆支援・連帯すること

☆忘却とたたかチェルノブイリの真実を語ること

☆架け橋となり、パートナーとして国境を越えて協力すること

☆ベラルーシの市民社会の構築を推進すること

核の脅威のない世界のために

◆チェルノブイリの子どもたち

ベラルーシはチェルノブイリの影響をもっとも受けた国だ。食糧、土地、水等の全てが放射能汚染され、住民の健康を徐々にむしばんでいる。特に影響を受けるのが子供たちだ。

チェルノブイリは被害者への裏切りももたらした。国が指示した沈黙と否定に対してベラルーシの人々は立ちあがった。苦しむ子どもたちのためにたたかいは始めたのだ。

1989年、ベラルーシで初めての非政府市民団体、公益基金「チェルノブイリの子どもたち」が設立された。外国への道が開かれ、子供たちを支援するため多くの人々が協力した。これまで汚染された地域の子供たち13万人が外国での保養に参加できた。ベラルーシの住民200万人以上が人道的支援を受けた。現地での自助グループができ、障害児や高齢者のための施設が設立された。

東西を結ぶネットワークが成立した。

◆私たちのチェルノブイリ・プロジェクト

私たちの市民団体は当初からベラルーシの「チェルノブイリの子どもたち」基金を応援している。毎年チェルノブイリの子供たちを保養のためにロットヴァイルに受け入れているほか、ベラルーシで基金がおこなう自助プロジェクトを支援している。

- ☆多くの寄付者や助成者の支援のもと現地での活動への資金援助
- ☆ロットヴァイルの施設と協力して基金のボランティアメンバーに実習の機会を提供
- ☆ベラルーシとロットヴァイルの若者の交流
- ☆ロットヴァイルの女性グループとの協働で基金の女性プロジェクトと密接な連携

ロットヴァイルの多くのグループや協会がベラルーシへの架け橋に参加し、多くのプロジェクトを支援している。それは例えば次のような団体だ。

- ☆アムネスティ・インターナショナル、ロットヴァイル・グループ
- ☆ドイツ赤十字社、地区協会
- ☆女性による女性の援助
- ☆糖尿病の子供たちのため IGEL グループ
- ☆PRoFI（ロットヴァイルの女性政治団体）
- ☆高齢者支援マリー・キャンプマン
- ☆障害者自助協会

ロットヴァイル市も数年来、この東西の交流事業を支援している

◆支援の方法

わたしたちの活動には協力者が必要です。

- ☆活動に関心のある方は定期的に開かれるミーティングにおいでください。
- ☆資金援助が可能な人は—チェルノブイリ支援のために寄付や定期的な支援を。寄付金は税計算上の控除可能です。
- ☆具体的な協力ができる人は—運転手、チェルノブイリの子供たちの世話、文書作成などが必要です。
- ☆継続して支援する人は—団体の会員になりましょう。

◆パートナー団体

ドイツ連邦「チェルノブイリの子供たち」連盟 www.bag-tschernobyl.net
ベラルーシの基金「チェルノブイリの子供たち」

◆連絡先

アンゲラ・ゲスラー Suppengasse 4, 78628 Rottweil / Angela.Gessler@t-online.de
ハンス-ユルゲン・ラム Dahlienstr.2 78661 Rottweil / hans-juergen-ramm@gmx.de

ベラルーシ、ドイツからの参加メンバー紹介

<ベラルーシより>

Ljudmila Maruschkewitch (Ludmilla) リュドミラ・マルシュケヴィッチ

ベラルーシ・ミンスク在住、1950 年生まれ。チェルノブイリから近い、ベラルーシの小さな村 Lepel の出身。原発事故後は、村の全ての住民が強制避難となった。現在は、村や近隣は避難区域から外されている。中学校で数学教師として働き、健康上の理由で辞めてからは、市の機関でプログラマーとして数年間従事、現在は退職。1992 年より、ベラルーシの非営利団体「チェルノブイリの子どもたち」にボランティアとして参加。数々の人道的・社会的プロジェクトに携わる。自身も 20 歳の頃から糖尿病を患い、団体の中で「糖尿病と生きる」という子どもたちのためのプロジェクトを開始、ロットヴァイルの団体とも協働して 20 年来活動している。

Marija Bratkowskaja (Mascha) マリア・ブラトコフスカヤ

ベラルーシ・ミンスク在住、1960 年生まれ。ベラルーシの東に位置する Polessje 地方出身。チェルノブイリ原発事故の影響を受ける。「チェルノブイリの子どもたち」にボランティアとして従事し、病気や障害、経済的困難などを持つ子ども達のための支援活動をコーディネートする。ドイツ語教師としても働き、ロットヴァイルの団体とも協働。趣味としてベラルーシ独自の文化や伝統を守っていくことにも注力し、民謡グループ“Gastinez”でも歌う。

Alena Damaneuskaya (Lena) アレーナ・ダマノイスカヤ

チェルノブイリ原発事故直後にミンスクで生まれた 26 歳。ミンスクでドイツ文学を学んだ後、IT 企業でマーケティング担当として働きながら、経営学も学ぶ。昨年からシュトゥットガルトでドイツ文学と英文学を学んでいる。原発事故の問題に対して、無関心であることは決してできず、被害者のために力を尽くし、ベラルーシの若者たちから環境にやさしく、そして持続可能な考え方を広めていきたいと考えている。2004 年から「チェルノブイリの子どもたち」に関わりはじめ、ボランティアスタッフとしてフラッシュモブ等を企画、そしてロットヴァイルでの若者プロジェクトの企画運営にも携わりながら、自身も参加。また、病院で子どもたちに朗読をしたり、孤児のための募金活動、障害を持つ若者たちのケアなど、様々な活動を精力的に行っている。また、学生の政治委員会にも携わり、「外国人学生」「言語センター」について責任者をつとめる。

Aliaksandr Hirylovich (Sascha) アレクサンダー・ヒリロヴィチ

ベラルーシ・Bychow 出身の 23 歳。ベラルーシでは、ドイツ語と教育学を学び、現在は途上国の子どもたちの支援団体「世界のためのアクション (Aktion Eine WeltRottweil)」でインターンをしている。5 年前から「チェルノブイリの子どもたち」に携わり、2 年以上前からロットヴァイルの「核の脅威のない世界のための市民団体」のプロジェクトにも参加。インターン後は、ドイツの大学で秋から社会学と政治について学ぶ予定。

Elena Protasevich エレナ・プロタセヴィチ

ミンスク出身の 23 歳。現在はシュトゥットガルトで測量学と地理情報学を学ぶ学生。ミンスクで、生態学の情報技術を 3 年間学んだ後、ドイツ南西部のドナウエッシンゲンにある環境団体で 1 年間インターンをし、環境や再生可能エネルギーについて多くを学ぶ。環境に対して大きな関心を持ち、2013 年 7 月に行われた日独ベラルーシ 3 カ国の若者プロジェクトにも参加。

Katsiaryna Lisouskaya (Katja) カテリーナ・リゾウスカヤ

ベラルーシ、ブレスト出身、20 歳。2007 年から「核の脅威のない世界のための市民団体」の環境、エネルギー、社会福祉をテーマにした若者プロジェクトの参加者。大学入学前から、エネルギー生産やエネルギー供給のテーマに大きな関心を持っていた。ベラルーシはチェルノブイリ原発事故で大きな被害を受けたことから、特に原子力に依存しないエネルギー供給に関心がある。高校卒業後、ロットヴァイルでの若者プロジェクトに参加したことがきっかけで、再生可能エネルギーについて学ぶことを決心。ベラルーシ国立技術大学でエネルギー効率について 2 年半学んだ後、南ドイツで再生可能エネルギーのプロジェクトを行う Solarcomplex 社にてインターン。終了した現在は、ドイツの大学で引き続き、再生可能エネルギーについて勉強したいと考えている。

<ドイツより>

Angela Gessler アンゲラ・ゲスラー

56 歳。言語障害を持つ子どもたちの学校で 25 年間教師をしており、「核の脅威のない世界のための市民団体」の代表でもある。「核の脅威のない世界のための市民団体」には 1986 年から参加。市でエネルギーに関するイベントを何度も主催してきた。1990 年からベラルーシにある「チェルノブイリの子どもたち」と協力し、被ばくした子どもたちをロットヴァイルでの 3 週間の保養プロジェクトを行う。また、「チェルノブイリの子どもたち」が行う、糖尿病や障害を持つ子どもたちや、移民や高齢者のための自助プロジェクトの支援も 15 年以上前から始める。その他に、エネルギー転換をテーマにベラルーシとドイツの若者が参加する若者プロジェクトを企画し、2013 年には初めて日本の若者も参加。これまで数多くのプロジェクトをベラルーシで行っており、毎年若者たちとチェルノブイリ市民運動を学ぶために、ベラルーシを訪れている。今回のツアーの企画責任者。

Hans-Jürgen Ramm ハンスユルゲン・ラム

ロットヴァイル近郊在住の 61 歳。1986 年から「核の脅威のない世界のための市民団体」の創設メンバーとして活動。英語や地理、神学を学び、教師として 8~16 歳の生徒に英語、数学、ドイツ語、倫理、体育自然科学などを教えている。チェルノブイリ原発事故に大きな衝撃を受け、今もなお社会に存在する原発とその危険性をテーマに時間や労力を費やしてきた。そのようにして、23 年前から小さな活動的な仲間のグループに所属し、数年前から副代表を勤めている。家族は妻と 3 人の子ども。趣味は読書、サッカー、バドミントン、自転車、カヌー、トレッキングなど。

Katharina Ebinger (Kata) カタリーナ・エビンガー

シュトゥットガルト在住の 22 歳。バーデン・ヴュルテンベルク州の BUND (FoE ドイツ) 若者チームの広報担当で、現在インターンをしている。2013 年夏にロットヴァイルで行われた日独ベラルーシの若者プロジェクトに参加。エネルギーシフトと原発をテーマにボランティアをしている。特に、反対運動のカルチャーと市民参加、エネルギーを使わない生活スタイルなどに関心がある。国際関係や経営学 (CSR)、心理学にも関心あり。英語堪能。趣味は読書、旅行、語学、文化鑑賞、美術鑑賞など。

Sonja Mehl ソニア・メール

ロットヴァイル出身。フライブルクで昨年 10 月から心理学を学ぶ 20 歳。高校卒業後、チリの貧困地区の幼稚園で半年間ボランティアを経験。絵画や歌うことが好きで、外国の文化や言語に大きな関心がある。数年前から「核の脅威のない世界のための市民団体」の活動に参加。2010 年、チェルノブイリ原発事故から 25 年を記念してジュネーブへ平和旅行にきた「チェルノブイリの子どもたち」と「核の脅威のない世界のための市民団体」と出会い、彼らの勇気と活動に感銘を受けた。これを機に、2012 年と 2013 年にベラルーシへの旅行へも同行し、後に若者プロジェクトでロットヴァイルを訪れたベラルーシの若者たちとも知り合う。

Sandra Heintel サンドラ・ハインテル

ロットヴァイル在住の 38 歳。市の子ども・青少年センター (教育等活動) と、小さな劇場の管理部門とで働く。2011 年に「チェルノブイリ原発事故から 25 年」という劇場での展示会で「核の脅威のない世界のための市民団体」を知る。それ以来、団体のベラルーシ訪問に 2 度同行し、多くの活動的な人たちと出会い、そして社会や環境のためのプロジェクトを学ぶことができた。

Jutta Gaukler ユッタ・ガウクラ

1961 年シュトゥットガルト生まれ。農業生物学を学んだ後、自治体の環境保全に長年携わる。ボーデン湖の辺にある自然保護センターの所長を勤める。また、30 年以内に地域のエネルギーを 100%再生可能エネルギーに転換すると掲げている Solarcomplex 会社で「エネルギー体験ツアー」の企画実施も行っている。このツアーでは、再生可能エネルギーを生産する様々な会社の独自のプロジェクトを見学することができる。例えば、バイオガス、木材チップ、地域熱供給、水力、風力発電、熱や太陽光発電などでエネルギーの自給自足を行うバイオエネルギー村を訪れる。このようなツアーを年間 100 ほど行っている。そして、このツアーがきっかけに、数年前に「核の脅威のない世界のための市民団体」と知り合う。趣味はスポーツや芸術鑑賞。人との出会いを大切にしたい。

ベラルーシ共和国

首都：ミンスク(仙台市と姉妹都市)

面積：207,600 km²

人口：941万人(2013年度)

公用語：ベラルーシ語、ロシア語



ドイツ連邦共和国

首都：ベルリン

面積：357.121 km²

人口：8033 万人(2011 年度)

公用語：ドイツ語



ロットヴァイルの街

